

“自由の国”の女性たちが 味わっていた不自由

中野 理恵

1年ほど前になるだろうか。セザール賞5部門ノミネート作品の日本配給権を検討しないか、とのメールを受け取った。セザール賞とは米国のアカデミー賞に相当するフランスの映画賞、いわば、フランス・アカデミー賞である。その映画の英題が個人的には、(いかにも面白そう!)だったので、まずは見ようと思い、詳細を確認したところ、主演がジュリエット・ピノシュ。フランスのトップ俳優ではないか。背伸びしても手の届かない契約内容だろうと諦めていたところ、『5月の花嫁学校』の邦題で公開されると知った。

時は1967年、舞台はブドウ畑で知られるフランス北東部アルザス地方にあるヴァン・デル・ベック家政学校。緑あふれる長閑な朝、シスターがタバコを吸いながら教室の窓を開けている。校長のポーレット(ジュリエット・ピノシュ)は、アダモ(サルバドール・アダモ。1943年イタリア生まれの歌手で作曲家)が歌う『雪が降る』の流れる中、バストを強調したピンクのスーツで決め、スプレーで髪を整えると、学校のスポンサーである夫ロベールの部屋に行く。すると「今年の新入生は、15人減って18人」と告げられる。

だが、臆することなく、件のタバコ・シスターと、料理長で義妹のジルベルトを従えて、さっそうと学校の扉を開き、集まっていた少女たちを前に「理想的な主婦になれる鉄則7カ条を教える」と、訓示を始めた。7カ条とは①夫に従うこと ②家事の義務 ③家計を預かること ④家族の健康を管理すること ⑤気を抜かない ⑥アルコール厳禁 ⑦夜の夫婦生活のオツトメ、であった。さらに、寄宿舎では、パジャマはダメでネグリジェでなければならず、夜のトイレは、4人にひとつだけ与えられている小さな〈つぼ〉にしなければならない…



©2020 - LES FILMS DU KIOSQUE - FRANCE 3 CINÉMA - ORANGE STUDIO - UMEDIA

等々、想像できないほど、不自由そのものだった。「法律の勉強をしたい」「美容師になりたい」との希望を抱きながらも、親に従って入学している少女もいたのである。そんなある日、食事中にウサギの骨を喉に詰まらせてロベールが急死してしまう。すると、彼が賭博にのめり込み、莫大な借金を残していた事実を銀行から知らされる。さあ、それからどうなるか…。

1967年と言えば、泥沼化したベトナム戦争のニュースが連日、新聞やテレビで報道され、米国では若者が徴兵拒否をし、ベトナム戦争反対のデモがあり、日本の米軍基地から戦闘機がベトナムに向けて飛んでいた。翌1968年には全共闘運動やウーマンリブ運動、パリ五月革命と旧来の価値観に異議を唱える動きが世界的に起きている。ヴァン・デル・ベック家政学校も、その波を受け始めるのだった。

〈自由の国フランス〉が僅か50年前には女性にとってはこれほど不自由だったとは不覚にして知らなかったのだが、同時に女性の自立や自由をコメディタッチで描く監督の力量にも感心した。ところで、〈面白そう!〉な英題とは“How to be a Good Wife”である。

《Cinema Information》

『5月の花嫁学校』

フランス映画(109分) / 監督: マルタン・プロヴォ
/ 5月28日よりヒューマントラストシネマ有楽町ほか全国順次公開

なかのりえ: 映画プロデューサー、ディストリビューター。(株)パンドラ代表。『ハーヴェイ・ミルク』を第1回配給作品として、これまでに100本を超える映画を配給し、視覚障がい者のための副音声付商業劇場上映を日本で初めて実現。著書に『すきな映画を仕事にして』(現代書館, 2018)等。